

# 翻訳をとおして見る日本のアメリカ理解

難 波 雅 紀

## I

本発表では、「翻訳をとおして見る日本のアメリカ理解」というテーマのもと、19世紀アメリカを代表する作家ナサニエル・ホーソン（Nathaniel Hawthorne, 1804-64）の『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）に焦点を絞り、3種類の日本語訳の比較検討を行ない、日本のアメリカ理解の質的変容の一端を辿ってみる。<sup>①</sup>

本発表が扱う『緋文字』の日本語訳は、以下の3点である。

- 1) 佐藤清訳 『緋文字』 岩波書店、初版1929年。
- 2) 鈴木重吉訳 『緋文字』 新潮社、初版1957年。
- 3) 八木敏雄訳 『完訳緋文字』 岩波書店、初版1992年。

具体的検討に入る前に、これらの日本語訳の出版経過を、もう少し詳しく見てみることにする。まず、わが国初の『緋文字』の全訳は、佐藤清訳により、1917年にキリスト教興文協会から出版される。<sup>②</sup>この全訳は改訂され、「再販の運びになっていたが、ある事情のために果たされないでいた」（佐藤訳、p. 298）ため、1929年に岩波文庫として日の目を見るまで、かなりの年月を費やした。その後、この訳は増刷を重ね、1955年には第27刷改版が、そして、1983年には第57刷が発行されている。ただし、この佐藤訳は、全訳と謳われているが、原典にある“The Custom-House”の章を省いているため、正確には全訳ではない。一方、1957年には、鈴木重吉訳の『緋文字』が新潮文庫として出版される。この訳も“The Custom-House”の部分を除外しているので、全訳ではない。しかしながら、1978年には第32刷が発行され、鈴木訳も着実な売れ行きを記録している。<sup>③</sup>そして、1992年、八木敏雄訳の『完訳緋

文字』が岩波文庫に加わるに及んで、やっと“The Custom-House”を含む全章が日本語に翻訳される運びとなる。八木訳は、1998年に第14冊が発行され、現在に至っている。<sup>(4)</sup>

この3種類の日本語訳を全般的、網羅的に比較検討することは、時間の制約もあり困難である。従って、幾つかの特徴的な箇所注目し、そこから翻訳の質的差異を明らかにしていくことにする。

## II

『緋文字』をざっとお読みしておくならば、主な登場人物は、牧師アーサー・ディムズ戴尔 (Arthur Dimmesdale)、人妻ヘスター・プリン (Hester Prynne) とその夫ロジャー・チリングワース (Roger Chillingworth)、そして、ディムズ戴尔とヘスターの間に生まれた不義の娘パール (Pearl) である。また、物語の梗概はこうだ。パールを産んだことで姦通が露見したヘスターは、その罪の印である緋文字を胸につけて生きなければならない。一方のディムズ戴尔は、罪を告白できず苦悩を深めていく。チリングワースは、妻を寝取った男への復讐を誓う。そして、ディムズ戴尔がヘスターの相手だと知ると、チリングワースの復讐心は、ディムズ戴尔の精神を破滅へと追い込もうと激しさを増す。それでも、神の慈悲を悟ったディムズ戴尔は、罪を告白することでチリングワースの手を逃れ、最後は安堵のうちに昇天していく。目的を失ったチリングワースも程なく亡くなると、残ったヘスターはパールを連れ、ヨーロッパに旅立っていく。

そこで、具体的な箇所に注目し、詳しい検討に入ることにする。まず初めに、“Recognition”と名づけられた章の冒頭に注目してみよう。ヘスターは罪ゆえに教会の軒先にある晒し台に立たされ、衆目の厳しい視線を受ける。そんな中で、彼女は群衆のはずれにチリングワースの姿をふと目にしてしまう。そのあたりを、原文は次のように説明している。

From this intense consciousness of being the object of severe and universal observation, the wearer of the scarlet letter was at length relieved by discerning, on the outskirts of the crowd, a figure which irresistibly took possession of her thought. An Indian, in his native garb, was standing there; but the red men were not so infrequent visitors of the English settlements, that one of them would have attracted any notice from Hester Prynne, at such

a time; much less would he have excluded all other objects and ideas from her mind. By the Indian's side, and evidently sustaining a companionship with him, stood a white man, clad in a strange disarray of civilized and savage costume. (underlines mine)<sup>(5)</sup>

この箇所を、八木訳、鈴木訳、佐藤訳の順で並べてみる。

きびしい衆人環視の的になっているというこの強烈な意識から、緋文字を身につけた女がやっと解放されたのは、群衆のはずれに、否応なしに彼女の心をうばった、ひとりの者の姿を認めたからだった。インディアンがひとり、民族衣装を身につけ、そこに立っていた。しかし赤い肌をした連中がイギリス人の入植地に姿を見せるのは珍しいことではなかったので、このような場合にヘスター・プリンの注意をひくはずはなく、まして彼女の心から、その他のすべての事物や観念を排除してしまうはずがなかった。そのインディアンのそばに、しかもあきらかに仲間といった風情で、ひとりの白人が文明人の衣装と未開人の衣装を奇妙に取り合わせて身につけて立っていたのである。(八木訳、p. 86、下線筆者)

すべての人のきびしい注目の的になっているというこの強い意識から、緋文字をつけた女が救われたのは、抗し難い力で彼女の心を占める人影を、人ごみのはずれに認めて誰であるか知ったからだった。インディアンが一人、土人の服装でそこに立っていた。だがインディアンはイギリスの植民地では珍客ではなかったので、一人ではこんな時にヘスタ・プリンの注意をひかなかっただろう。ましてこの土人が彼女の心から他のものや空想を一切取除いてしまうことはなかったのだ。この土人のそばに、その連れと人目で知れる白人が、文明人と野蛮人の服装を奇妙にまぜて着て立っていたのだった。(鈴木訳、p. 21、下線筆者)

緋文字をつけていた女が、自分は人々のきびしい見世物になっているのだという、この燃えるような、はげしい意識から、やっと救い出されたのは、群衆のはしのところに、ある人の姿を見つけたためであって、その人の姿が、抵抗できぬように、ヘスタの思いを奪ってしまったのである。インド人の服装をしたひとりのインド人が、そこに立っていたが、イギリスの植民地で、そういう土人を見るのは何も珍しいことではないし、しかも、それは、こんなときに、ヘスタ・プリンの注意をひくほどの珍客ではなかった。まして、それがために、ヘスタの心から、あらゆる他のことがら、他の思いが、取りのけられはしなかったであろう。その

インド人のそばに立っていた白人は、はっきりと、そのインド人の伴侶であって、文明人と野蠻人の着物を不思議にだらしなくつけていたのである。(佐藤訳、p. 22、下線筆者)

八木訳では、「インディアン」(“Indian”)は、「民族衣裳」(“his native garb”)を身につけた、「赤い肌をした連中」(“the red men”)と訳されている。この「インディアン」が、いわゆるアメリカン・インディアンを指しているのは言うまでもなく、アメリカン・インディアンが白人植民地の周囲に頻繁に出没していたのも、事実として記録されている。「そのインディアンのそばに」(“By the Indian’s side”)立っている「白人」(“a white man”)がチリングワースである。彼の出で立ちは、「文明人の衣裳と未開人の衣裳」(“civilized and savage costume”)をまぜこぜにして着た、実に奇妙なものだ。つまり、八木訳は、「白人」を「文明人」と定位し「インディアン」を「未開人」と見做す認識論を、この物語が内包するイデオロギーとして顕在化させている。

この認識論は、鈴木訳においても、基本的に変わるところはない。例えば、鈴木訳では、“Indian”は「インディアン」とも「土人」とも訳されている。そこに軽蔑の意が含まれているかどうかは別にして、土人が、そこで生まれ生活する人、原始生活をする、その土地の人種を指すことを勘案すれば、それは八木訳の「インディアン」と類義であると考えられる。従って、鈴木訳でも、八木訳と同様に、「白人」を「文明人」とし、アメリカン・インディアンとしての「インディアン」を「未開人」あるいは「野蛮人」と認識するイデオロギーが、小説の背景に措定されているわけだ。

しかしながら、佐藤訳の場合、物語のコンテクストは、八木訳や鈴木訳とは全く異なる歴史認識を背景にしている。それを解く鍵となっているのが、“Indian”に「インド人」という訳語が充てられている点である。そもそも、インド人とは、どんな人々を指すだろうか。「インド人の服装をした」「そういう土人」とは、どんな人間を意味するだろうか。インド人が、インドで生まれ生活する人を指すとして、なぜそのインド人が17世紀の北米大陸にいるのか。北米大陸のイギリス植民地にいる「インド人」をなぜ「土人」と呼ぶことができるのか。白人すなわちイギリス人が植民地の回りでよくインド人を目撃したという話は、ついぞ読んだことがない。そして、「そのインド人のそばに」いるのが「文明人と野蠻人の着物」を着たチリングワースだとすれば、「文明人」である「白人」に対し、「インド人」は「野蠻人」だという

ことになる。一体、このイデオロギーは、どんな歴史に胚胎しているのだろうか。もちろん、“Indian”を「インド人」と訳すこと自体に誤りはない。問題は、この場面で「インド人」が登場することを妥当だとする判断にあるのだ。少なくとも、アメリカ植民地時代にはそうした判断を正当化できる根拠はない。

### III

更に、確認してみるべき箇所が“Recognition”ある。それは、ヘスターの辱めの経緯を、群衆の一人に訊ねるチリングワースが、さらに自分の身の上を語っているシーンだ。

“You say truly,” replied the other. “I am a stranger, and have been a wanderer, sorely against my will. I have met with grievous mishaps by sea and land, and have been long held in bonds among the heathen folk, to the southward; and now brought thither by this Indian, to be redeemed out of my captivity. . . .” (pp. 61-62; underlines mine)

ここでも、八木訳、鈴木訳、佐藤訳と追って見てみよう。

「ご推察のとおり」相手は答えた。「わたしはよそ者ですし、心ならずもですが、さすらい者です。わたしは海と陸とでひどい災害にあい、ここからは南のほうになります、その異教徒たちに、長いあいだ捕われていまして、いまやっと、このインディアンに連れられて、身代金とひきかえに解放してもらうためにやってきたのです。……」(八木訳、p. 88、下線筆者)

「仰言るとおりです」と相手は答えた。「私はこの土地の者ではなく、心ならずもあちこち歩き廻っております。海や陸の悲しい災難に出会い、長い間南の方で土人の間に捕われていました。そしていま身請けしてもらうためこのインディアンにこゝへ連れて来られたのです。……」(鈴木訳、p. 22、下線筆者)

「おっしゃるとおりでございます。」その人が答えた。「わたくしは、この土地のことは、あまり知らないものでございますし、それにすぎこのんではありませんが、方々流浪してまいったものでございます。わたくしは海陸ともに非常な災難をうけまして、長いあいだ、南國の異教徒たちのあいだに、とらわれていたの

でございます。そして今からだの自由がえられるように、このインド人に、こちらへつれて来てもらったのでございます。……」（佐藤訳、p. 24、下線筆者）

八木訳では、チリングワースは、「ここから南のほう」(“to the southward”)、つまり物語の舞台設定であるボストンから南の、例えばロードアイランドやナラガンセットあたりで、「そこの異教徒たちに、長い間捕われていまして」(“have been long held in bonds among the heathen folk”)と云い、自身のインディアン捕囚体験 (Indian captivity narrative) を告白している。この体験は、これまた事実として記録されているものである。鈴木訳も同様に、チリングワースは、ボストンからみて「南の方」のとある場所で、アメリカン・インディアンである「土人の間に捕われて」いたのである。従って、鈴木訳も、17世紀アメリカについての的確な理解に基づき、その歴史性や文化性を翻訳に再現していると言える。

ところが、佐藤訳になると、翻訳の背景にある歴史認識は、かなり異質であることが分かる。それは、“to the southward”を「南國」と理解していることに起因する。そのことで、物語に読み込まれたコンテキストのもつ矛盾が、一挙に露呈してしまうのだ。そもそも、「南國」とはどこを指しているのだろうか。通常、南国とは、南の方の国という意味だが、その南の方の国で、チリングワースは「土人」である「インド人」に囚われの身になっていたのだという。ボストンから見た南国がインドであるはずはない。もちろん、キリスト教徒から見れば、インド人は確かに異教徒には違いない。しかし、そのインド人が、インドではなく、南の方にあるどの地域に土着だったというのか。こうしてみると、佐藤訳は、諸々の矛盾や曖昧さを抱えた、八木訳や鈴木訳とは明らかに異質な歴史認識に基づいていると言わざるを得ない。

#### IV

そこで、比較検討の締めくくりとして、3種類の日本語訳の質的差異を如実に示している場面を取り上げてみることにする。それは、“The New England Holiday”と題する章で、植民地総督が新たに選ばれる日に、町の人々が新総督の就任パレードを見物しようと集まっている様子が描かれている箇所である。まず、テキストから引用しよう。

The picture of human life in the market-place, though its general tint was the sad gray, brown, or black of the English emigrants, was yet enlivened by some diversity of hue. A party of Indians—in their savage finery of curiously embroidered deer-skin robes, wampum-belts, red and yellow ochre, and feathers, and armed with the bow and arrow and stone-headed spear—stood apart, in countenances of inflexible gravity, beyond what even the Puritan aspect could attain. Nor, wild as were these painted barbarians, were they the wildest feature of the scene. (p. 232; underlines mine)

この箇所は、八木訳ではこうなっている。

広場の人間絵図の支配的な色調は、イギリスからの移民の地味な灰色、褐色、または黒であったが、その他の色も交って活気を呈していた。インディアンの一群——奇妙な刺繍をほどこした鹿革の衣装を身につけ、貝殻玉のベルトをしめ、黄土や赭土を肌ぬり、頭に羽をかざって、土俗的なけばけばしさでめかしこみ、弓と矢、それに石の穂先のついた槍で武装した連中——は清教徒たちも顔負けの謹厳な顔つきをして、人混みから離れて立っていた。絵具をぬりたくった未開人はなるほど野蛮ではあったが、その場でいちばん野蛮だったのは彼らではなかった。(八木訳、p. 338、下線筆者)

続いて鈴木訳は、下記のとおりである。

この広場にひろげられた人生の絵は、大体の色合はイギリス移民の淋しい灰か茶か黒であったが、いくつか違った色彩で引き立っていた。一団のインディアンが——珍らしい刺繍をした鹿皮のローブに貝殻玉の帯をしめ、黄土や代赭石を塗り、羽毛をつけて蛮人らしく飾り、弓矢と石突のついた槍で武装し、清教徒の顔つきでさえできないような硬直したまじめな表情で、人の群から離れて立っていた。また、この彩色した蛮人たちはあらくれてはいたがこの場でいちばんあらくれた風采をしてはいなかった。(鈴木訳、pp. 225-26、下線筆者)

そして、最後は佐藤訳である。

市場における活人畫の大體の色合いは、イギリス植民たちのくすんだ灰色、鳶色、あるいは、黒色であったが、それがあつた種の色でもって、いきいきとにぎやかにされた。奇妙に刺繍された鹿皮の衣裳、貝殻帯、光明丹、黄赭土、羽毛

などの野蠻な装飾で、それに、弓矢や、石槍で身をかためていた一隊のインド人は、清教徒たちの様子もおよばないほど、ぎこちない、いかめしい容貌をして、はなれて立っていた。これらの極彩色の野蠻人たちも、野蠻ではあったが、この場面の一番野蠻なものではなかった。(佐藤訳、p. 246、下線筆者)

八木訳によれば、パレードを見物する様々な群衆に交じって、「インディアンの一群」(“A party of Indians”)がいる。その風体は、「土俗的なけばけばしさ」(“their savage finery”)を特徴とするものだ。彼らは皆「鹿皮の衣裳」(“deer-skin robes”)に身を包み、「貝殻玉のベルト」(“wampum-belts”)を首から下げている。顔に「黄土や赭土」(“red and yellow ochre”)を施し、頭には「羽」(“feathers”)を飾っている。加えて、「弓と矢、それに石の穂先のついた槍」(“the bow and arrow and stone-headed spear”)を手にはしているとすれば、そのイメージは、デフォルメされた馴染みのアメリカン・インディアン像、正しく「絵具をぬりたくった未開人」(“these painted barbarians”)に他ならない。そして、「代赭石」を砕いて造った顔料が「赭土」だということを思い出せば、鈴木訳の「一団のインディアン」、「この彩色した蛮人」は、八木訳におけるネイティヴ・アメリカンのイメージと本質的に差異はない。

そうであればこそ、佐藤訳が提示する「極彩色の野蠻人」のイメージは、ちぐはぐであり、むしろ滑稽にさえ感じられてしまう。パレードを待つ人々の中で一際目立っているのは、「一隊のインド人」なのである。しかし、一般的にわれわれが想起するインド人とは、どんな人物像だろうか。頭に白いターバンを巻き、絹のような薄手の生地のできた白い着物を着ているイメージは、容易に浮かんでくる。それは、余りにも紋切り型かも知れない。けれども、だからといって、「鹿皮の衣裳」を着て「貝殻帯」を占め、「光明丹」と「黄赭土」で化粧をし、頭に「羽毛」を載せているイメージをインド人として想像することが果たしてできるだろうか。この「野蛮な装飾」に、「弓矢」と「石槍」を携えた人物像自体は、確かに、八木訳に描き出された「インディアン」、または鈴木訳の「インディアン」ないし「土人」のイメージと変わるところはない。しかしながら、それが「インド人」であるのは、一体何故なのか。結論からすれば、齟齬を把握することができない歴史認識が、“Indian”をアメリカン・インディアンという意味での「インディアン」ではなく「インド人」と訳すことに妥当性を与えているのである。



## V

ここで断っておくが、本発表の意図は、『緋文字』の3つの日本語訳を比較検討し、新しい歴史認識に立って古い歴史認識を揶揄することではもちろんない。そんなことをしても、大した意味はない。なぜならば、歴史そのものは通時的であるにせよ、その認識は共時的でしかないからだ。例えば、自然主義の真っ只中に生きていた人間が、純粋なロマン主義の世界観を持つことができなかつた様に、個人の、あるいは社会の歴史認識は、時代の制約から逃れられるものではないのだ。この視座に立てば、歴史認識の質的差異は、新しい古いという違いはあっても、その差異自体に優劣などあり得ないことが分かる。つまり、質的差異は、歴史認識の成熟度の違いを示唆しているに過ぎないということなのだ。繰り返し言うが、“Indian”を「インド人」とした佐藤訳が、八木訳や鈴木訳とは異なり、齟齬を容認している原因は、その歴史認識を育んだ時代に潜んでいるわけだ。翻訳には、このように、個人の、あるいは社会の共時的な歴史認識を忠実に例証する機能がある。そうであれば、今回の比較検討をとおして見えてくる重要な点は、“Indian”をアメリカン・インディアンを意味する「インディアン」と捉える歴史認識が、それを「インド人」と見做す歴史認識に取って代わったのが、そう遠い昔の話ではないということだ。なぜならば、それが、日本におけるアメリカ理解の質的な成熟度を物語っている、とても興味深い一例に他ならないからである。翻訳とは、単に一言語を他言語に置き換える技術を指すものではない。翻訳とは、個人の、あるいは社会の異文化理解を示す、深度計の役割を果たすものである。別言すれば、それは、時代に縛られた個人の、あるいは社会の異文化理解の有り様を確認するためのテキストなのである。

## 注

- (1) 本稿は、平成17年10月29日に開かれた、実践英文学会大会でのシンポジウム「翻訳をめぐる——語学・文学からのアプローチ」における発表の要旨である。
- (2) 佐藤清『緋文字』（東京、岩波書店、1983年）、p. 298。以後、同書は佐藤訳と略し、引用は、括弧内にページ数のみを記す。
- (3) 鈴木重吉訳『緋文字』（東京、新潮社、1978年）。以後、同書は鈴木訳と略し、引用は、括弧内にページ数のみを記す。
- (4) 八木敏雄訳『完訳緋文字』（東京、岩波書店、1998年）。以後、同書は八木訳と略し、引用は、括弧内にページ数のみを記す。

- (5) Hawthorne, Nathaniel, *The Scarlet Letter. Vol. 1 of The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus: Ohio UP, 1964.), p. 60.以下、同書からの引用は、括弧内にページ数のみを記す。